チート勇士、貞操逆転世界にてダンジョンに挑む

ナイスウッホ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

貞操観念が逆転した、女ばかりの世界で勇士をやる話。

チート貰って無双できるかと思ったら、ダンジョンは悪辣すぎてそんなこともなかった。残念だね。

ついでに主人公くんは色んな女の子と関係を持つかもしれません。神のみぞ知る。

みなさんもダンジョンメーカーやりましょう！

１２０円で買えて、しかも面白い。

やり込み要素しかない。楽しいぞ！

目次

街にて　その1　1
街にて　その2　6
街にて　その3　11

街にて　その1

「今日が待ちに待ったステータス更新の日だね！」
「そうだね。朝ごはん食べ終わったら一緒に行こうか」
朝食で出されたシチューをスプーンで掬い、口に運びながら俺は返事をした。
今日は1ヶ月に1度のステータス更新の日だ。全国民が女神からジョブを授かり、そのジョブに従って俺たちの社会的身分が決まる。たとえば「農夫」だったり、「村人」だったり、「冒険家」や「剣士」なんてものもある。そしてそれぞれのジョブは、レア度と呼ばれる☆1～☆10までの数値で表されるのだ。
当然ほとんどの人が持つのは「低レア」だが、その後に経験値を積めば女神から認められて、上位ジョブに変化することもある。ジョブによって元々決まっている「固定スキル」なんてものもあるため、みんながみんな上位ジョブになることを夢見ている。
『ステータス』
独り言を言うような声量で呟く。
すると、自分の目の前に文字の書かれた透明な板が浮かび上がってくる。

名前／タイガ・タカハシ
レベル／25
ジョブ／　☆7　　ID：男子高校
スキル／　SS　異世界の勇士　S　瞬閃剣　C　危機脱出
SS異世界の勇士／（持続効果）戦闘開始時、『無効』次に自分に与えられるデバフを無効化する。どんなデバフであっても。
呪いと相殺されると『不死』HPが1以下になる攻撃を受けた時、HPが1になり死なないを10獲得します。
S　瞬閃剣／（持続効果）敵を攻撃する時に敵の防御を無視したダメージを与えます。そして敵を攻撃するたびに『回避』次の1回分の

攻撃を回避すると『集中』次の攻撃が５０％の追加ダメージを与えるを４獲得します。
Ｃ　危機脱出／（持続効果）ダンジョンに入場する時、『罠回避』獲得分、罠に引っかからなくなるを２獲得します。
罠によるダメージが３０％減少します。

親の顔より見たステータス画面だ。嘘、転移前の記憶はもう残ってないから、両親についても覚えていない、なんて。
今のレベルは２６。今日の更新で上がってるといいな。
教会に行って聖職者のジョブを持つ人にステータス更新をやってもらうことによって、俺が今見ているこの画面も変化するってわけだ。
正直ツッコミ所はたくさんある。
まずジョブ名の男子高校って何だ？あるとしても男子高校生だと思うんだけど。しかもそれがジョブ名っていう。
俺も剣士とか魔導士とかの分かりやすいジョブが良かったなと思う一方で、このジョブで良かったとも思っている。というのも、ジョブと固有スキルのレア度が高く、効果も有用なものだからだ。やっぱチートまではいかなくても俺ｔｕｅｅｅしたいしね。
女神に感謝。会ったことないけど。
目の前で机を挟んでもくもくとパンを口に運ぶ女――俺はジナと呼んでいる、のステータスを見せてもらったことがある。
以前教えてもらった時は、レベルは１９、ジョブは☆２魔導士、スキルは「魔法の矢」と「冷気の矢」、確かランクはそれぞれＣとＢだった覚えがある。
つまり、俺はこんなよく分からんジョブとスキルでも、恵まれてるってことだな。
特にスキル・「異世界の勇士」の『不死』１０の獲得効果が傑出して優れているそうだ。
前に更新をやってくれた聖職者のお姉さんが言うには、敵のデバフが無ければ１０回も復活できるということらしい。ゾンビかな？

まあこの復活を妨害するデバフを、敵がばら撒いてくるっていうのがキモなんだけどね。もう一個のスキルの方も――――おっとジナも食べ終わったようだ。
「じゃあ行こっか」
「うん」
彼女がツインテールを揺らしながらテーブルから立ち上がったのを見て、俺もお盆を手にとって片付けに行く。
彼女、ジナ・フィオサージュとは、俺がこの世界に転移してからこの街のギルドにお世話になって以来、そこからずっと続く仲だ。
気が付いたら神殿みたいな場所にいた俺は、息をつく間もなくその場にいた聖職者さんに紙と身銭を渡された後、グイグイと押されてギルドにまで来た。そこで紹介されたのがこのジナ・フィオサージュという金髪ツインテールの魔導士だったという訳だ。それと本当はもう1人いるんだけど、ここでは割愛する。
この世界に来て初めに感じたこと――――それは、とても目のやり場に困るということだ。
見渡す限りに女、女、女。
女しかいない。しかも美人ばかり。
ちなみにこの世界に来て3週間ほど経ったが、男はまだ両手で数えられるほどしか見ていない。
男が少ないだけならまだいいかもしれない。しかし、女性はみんな巨乳だし、全員際どい衣装をしてるのだ。これが非常に困った。
顔を見て話すには顔面偏差値が高いから照れるし……かと言って視線を下に逸らすと、激しく存在感を放っている乳が、しかも谷間なんて見せびらかすのがデフォルトだと言うかのように飛び込んでくるのだ。
そっからさらに視線を下げても、Iラインモロだしの激しい角度のハイレグか、絶対領域なんて言葉が存在しないであろうクッソ短いスカートが目に入るのだ。
『覚悟』、決まってますね？
そしてその例に漏れず、杖を腕に抱いてこちらをチラチラ見てくる

ジナも、むっちりとした太ももが丸見えなローブを着ているわけだ。君さぁ、そんなとんがり帽子を被る前に、もっと隠すべきところがあるんじゃあないか???

……じゃなくて。ジナがジーッと熱視線を送ってきている。流石に気になる。

「あのさ、そんな見られると困るんだけど……」

「え!?あ、ごめん」

別に怒ってる訳じゃないけど、ジナと会ってから2週間経った今も時々こんなことが起こる。

可愛い女の子に見つめられるのは嬉しいんだけどね、と誰にも聞こえないような声で呟く。

とはいえ街のどこに行ってもこっちを舐め回すような視線ばかりで、最初は辟易していた。ギルドの建物に入る瞬間なんて、毎回部屋の全員の目がこっちを向くから普通にびっくりする。もうだいぶ慣れつつあるが。

でもそれもしょうがないと言えばしょうがない。

さっき言ったようにこの世界は女ばっかりで男が少ないからだ。それが何対何なのかは知らないけれど。この世界にも戸籍制度はあるから、きっと国の役人なら知ってるのかもしれない。

そしてただでさえ男が珍しいこの世界において、さらに俺みたいなダンジョン攻略者になる男は滅多に見ないそうだ。

なんて言ったってダンジョンは危険だ。どの部屋も魔王が仕掛けた罠で溢れているし、戦闘部屋に入ってしまった時はもっと悲惨だ。凍傷死、感電死、火傷死、さらには〝死体爆発死〟なんてモノも存在するが、単純にモンスター共によって殺されたり捕食されたりすることもあるのだ。

俺が攻略者やってる理由?そりゃあ勿論ありますとも。そのうち語らせてもらおうかな。

という訳で、ダンジョンで死んだほとんどの場合において、その人の死体は帰ってこない。なんならモンスター共にネクロマンサーがいた場合、次のダンジョン侵攻の際に顔を合わせるなんて最悪の事態

もある。
しかし、人類はダンジョンを攻略しなくてはならない。なぜなら人類が攻めていないと、魔王が人類の街に攻めてくるからだ。そうしていくつもの街や都市が滅びた。かつて興隆を誇っていた国の首都も、あっけなく魔王によって攻め落とされた。
攻略に成功せずとしても、魔王に街を攻めさせないように、定期的に魔王軍の戦力を削っておく必要がある。
だから人類は魔物共を駆逐するために、ダンジョンを攻め続けるのだ。例え何百、何千もの市民の命が無駄に消費されようとも。
とはいえそんな魔物との戦いで切羽詰まった世界でも、街は賑わうし、活気で溢れている。特に俺らが生活の拠点にしている都市であるリンツ市は、魔物との前線が遠いことや魔法大学などの学術拠点となっていることもあって、常に多くの人で溢れている。
「ねえジナ、今日の更新でさ、もしジョブが進化してたら美味しいもの食べに行かない？」
「……いいわね！今度こそ私は精鋭魔導士になっているに違いないわ！」
任せてちょうだい！と言うかのようにジナが豊かな胸をゆっさりと揺らしながら胸を張った。自慢げなドヤ顔が可愛いんだなこれが。
様々な格好の人々が行き交う活気あふれる通りを歩きながら、俺たちは丘の上にある神殿に向かった。

街にて　その２

ステータスの更新を終えて。
「で、どうだった？」
「ううん、ダメだった……」
どうやら彼女のジョブは変わっていなかったようだ。神殿から出てきた瞬間のしょんぼりとした足取りと雰囲気で薄々分かってはいたが。
「今目指してるのって精鋭魔導士だよね？」
「そうね。まずはそこを目指してるわ。今週は５回もダンジョンに潜ったし、そろそろ経験値が溜まっていると思ったのだけど……」
精鋭魔導士とは、現在のジナの魔導士（☆２）の上位ジョブのことだ。レア度は☆３。
一般的には魔力の扱いが上手くなると進化するジョブであると言われているが、精鋭魔導士はスキルによって魔法攻撃に属性を込めれるようになるスキル「魔法の矢」に冷気や火炎、爆発を混ぜ込むことが可能となるので、魔法系ジョブ持ちの勇士にとっては最低限の技能が身についているかを確認する一つの指標ともなる。
「ゆっくりレベルを上げていけば、そのうちジョブも進化するんじゃないか？ジナなら大丈夫だよ」
「ん～……。私ならそのうちジョブが上がることは間違いないと思うんだけど、早く追いつきたいなって」
杖を右手に強く握りしめて、遠くを見ながら彼女はそう言った。その表情には彼女の才能から来る確固たる自信がじんわりと滲んでいた。
ここで追いつきたいと言ってるのは、彼女が組んでるパーティーメンバーにだろう。最近ダンジョンを潜るときは、俺、ジナ、そして聖職者と騎士の４人パーティーの場合が多い。当然のように２人とも女性であり、今日もこの４人でダンジョンに潜る予定だ。
その２人のうち、聖職者の名前はディタルジナといい、銀髪ロング

ヘアでおっとりとした性格が特徴的である。彼女の持つジョブ「精鋭聖職者」はレア度☆４の二次ジョブであり、彼女は女神教会でも新鋭の若手として知られている。

そして所持スキル（「精鋭聖職者」の固有ジョブ）である「神聖な光輝」スキル／　Ｓ　神聖な光輝

部屋内の味方全員のＨＰを４０（＋１．０攻撃力）回復し、デバフをすべて取り除きます。には、俺も何度も助けられた。これがダンジョン攻略にヒール・バッファー役が欠かせないと言われる所以だ。

ダンジョンには巨石が降ってきたり、矢が降り注いだり、落とし穴が掘ってあったりするシンプルな物理罠から、足を踏み入れた時点で毒や呪い、魅了や混乱といった搦手を仕掛けてくる悪辣な罠も存在する。

それ故に、ヒール・バッファー役をこなしてくれるディタルジナ、俺たちはディーと呼んでいる、には感謝が絶えない。

いつも助かってる……んだけど、見た目の清楚さにかこつけて無知を装って夜這いをかけてくるのはやめて欲しい。

「私のことが嫌いなのですか……？」とか甘く透き通った声で上目遣いしても無駄だからね⁇それで貞操を捨てるってなるのは何となく釈然とこないので……。（童貞故のこだわり）

可愛い女の子とイチャイチャおせっせは勿論したいんだけど、チョロいと思われるのも嫌だからね。

そしてもう1人の騎士、クーデリカは、ピンク髪のむっつりポニーテールであり、彼女もギルドに派遣された騎士として腕を鳴らしている。

時たま下ネタを言って滑り散らかす以外は、騎士団所属の勇士として魔王を討伐するという使命に燃えた模範的な勇士だ。本当に下ネタさえ言わなければ……。

彼女のジョブはレア度☆５「騎士」であるが、「騎士」の固有スキル「盾の壁」スキル／　Ａ　盾の壁

部屋内の味方全員に『防御』を3与えます。がこれまた強い。効果としてはパーティー全員に『防御』を3配るものであり、これによっ

て「騎士」パーティーメンバーは被ダメージを2回半減させることができる。
　しかももう1つのスキル「板金鎧」スキル／　B　板金鎧
（持続効果）戦闘開始時、最大ＨＰの３０％分の『鎧』を獲得しますが、さらに『鈍化』も3獲得します。も有用で、戦闘では集団の先頭に立って戦うカチカチのタンク役として、大きな貢献をしてきた。
「じゃあ当分はまたレベルと熟練度上げだね。今日も授業受けてからダンジョン潜ろうぜ」
「そうなるわね！そうだタイガ、今日のダンジョン基礎学の小テストちゃんと勉強した？」
「あたりまえだろ～？てかあれだけジナに言われてたら嫌でも覚えるって」
「えへへ！単位落として授業別々になっちゃうのは嫌だからね！頼むよタイガ！」
　杖を持ったまま両手を合わせてニッコリと満面の笑みを浮かべるジナ。トンガリ帽子から覗くブラウンの瞳に思わず吸い込まれる。かわいい。
　そんな彼女には魔法の才能がある。それも１０年に１人くらいの天賦の才が。
　ジナはその才能を国に見込まれて、リンツ市にある魔法大学に付属している教育機関に特待生として通っている。大学に通っている人は主に才能を持った人とお金持ちの人の２つに大別できるが、国が運営している施設として、実際は前者の人々が多くを占めている。
　故に魔法大学に通っている生徒は、ダンジョン攻略のための徴兵を回避できるという実利と共に、多くの人々の羨望を集めることとなっている。
　そして俺たちは今日も午後に授業があるので、こうして朝ごはんを一緒に食べてこれから授業に向かおうって訳だ。
　ちなみに俺も一緒に講義を受けることになっている。ジナの場合は国の目に留まってこうしてエリート街道を歩いているのだが、俺の場合は聖職者曰く「女神の託宣」によるらしい。どんなことを女神様

に言われたんだろうか？
この世界に召喚された時、俺は権力によってガッチガチに行動を縛られることも想像したが、実際はそんなこともなく、こうして自由な生活を送らせてもらっている。
おかげさまで毎日が楽しく充実している。時折男の少ない世界の弊害を感じることもあるが、基本的に男であるだけでチヤホヤされるし――とはいってもチヤホヤされすぎるのも好きではないが――、好きに生きる毎日が誰かに肯定されている気がして、気楽に過ごせている。
女神さまに感謝。俺ってば敬虔な信徒だね。
いつもの道を通り、古めかしい石造りの大学の門をくぐって、ジナと並んで教室に入る。そしていつも座っている一番後ろの列の窓際の席に2人並んで座った。
教室に入る際にいくつかの視線がこちらを向いた。どうやらまだ生徒は半分も揃っていないようだ。
「ひゅ～今日も熱いねぇお二人さん！」
「おはようリーシャ」
「ふん！おはよ」
丸眼鏡が特徴的な艶のある茶髪を一つにまとめた女の子が、俺たちを囃し立てながらスッと俺の左隣の席に座り、そしてわざとらしく身を寄せてきた。
ふわりと良い匂いが香る。そして左腕にむにっと柔らかい感触。
あの、当たり前のようにおっぱい当ててくるのやめてもらっていいですか？
彼女の名前はリーシャ・クノール。何かと俺たちに絡んでくる女の子である。例に漏れず乳はデカく、大学のローブを押し上げて存在感を主張している。
リーシャは被っている魔女帽子をくい、と指で持ち上げながら話しかけてきた。
「今日のダンジョン基礎学のテスト、勉強してきた？」
「うん、多分満点近く取れると思う。ジナが教えてくれたおかげで

バッチリだよ！」
　この会話の件さっきしたんだよな……なんて思いつつも、ジナの左肩にポンと手を置きつつ視線を合わせて答える。
「ふーーーん、そっか。あ、そうだ！私ちょっと不安なところがあるから教えてもらってもいい？」
「ん、いいよ。どこが分からなかった？」
「ちょっと、よくないわよ！それなら私が教えたっていいわよね？」
　ジナがすごい勢いでその場で立ち上がった。それに呼応するようにリーシャも弾かれたように立ち上がった。そして数秒間睨み合ったと思ったらそのまま手を取っ組みあった。
「あんた邪魔だよ！」
「そっちの方が邪魔よ！」
　今日もこの２人の間でバトルが勃発している。
　ギャアギャア騒ぐ２人に挟まれつつも、俺は机に目を落とし、テスト前最後の仕上げとして暗記分野の確認をするのだった。

街にて　その3

全ての講義を受け終わった後、ギルド職員曰く連絡があるとのことで、2人で学長室へと向かった。
太陽が西に傾き始めたころ、まだ講義が続いているのか、置き時計が時を刻む音だけが聞こえる廊下を俺とジナは他愛もない話をしながら歩いた。
学長室のドアを3度ノックして入る。
扉を開くとそこには乳のデカい女が3人いた。
「いらっしゃい。ふふ、時間通りだね」
「今朝ぶりですね。タイガ、ジナ」
「……。」
「いつもお世話になっております学長先生。それとローラ様も」
一瞬胸に目線が吸い込まれるが、なんとか堪えて目線を上げて挨拶をする。
そこにいたのは、まずはドロシー先生。俺たちが通っているこの魔導学校の学長をやっている。ベレー帽を被りモノクルを付け、緑を基調とした魔導師衣装に身を包んでおり、豊満とした胸がそのローブを押し上げている。うお、でっか……。
次にローラさん。俺たちのいつも行っている教会のトップだ。教区を治めているお偉いさんの筈なのに、教会に行くと毎回俺たちを出迎えてくれる。真っ黒な修道服を着た、金髪の優しそうなお姉さんだ。うお、でっか……。
最後に3人目なのだが、見たことのない人だ。
青いフードを目深に被っており、そこから覗く半月状の目が非常にクールな雰囲気を醸し出している。やはりデカい。
「それで今日はどんなご用件で？」
俺はドロシー先生に向き合ってそう尋ねた。
「そうだね、まずそちらのお方について話す必要があるかな。彼女は異端審問官さ。女神直属のね」

「ん、よろしく」
「え、異端審問官…!?」
「ちょ、ちょっとタイガ何やらかしたわけ!?」
　凄い勢いでジナに左裾を引っ張られる。
「まあ待ちたまえ。何か事件があったとかではなく、タイガ君の取り扱いで少し議論があってだな。」
「タイガ君はほら、異世界から召喚された勇士だろう?女神様から直々に保護を言及なさられるくらいには重要人物だったから、彼女に監視……コホン、もとい保護を頼んでいた訳だよ」
「ん。ずっと見ていた」
「実は我々の住まう都市グラナダから約数十キロの南方に、魔族どものダンジョンが発見されてな。それでタイガたちのパーティーに攻略を頼みたいんだが、それならエルシィをタイガたちと引き合わせた方が良いと判断したわけだ」
「ん。私の名前はエルシィ。よろしく」
　エルシィは小さく頷いて、透き通るような声でそう言った。
「そういえばなんで俺たちのパーティーなんですか?」
「それはタイガが教会の方針における最低基準に達したからですわ。女神様は貴方がもっと力をつけて、国を救うことを望んでいらっしゃいます。そのためこれからはもっと多く魔物を倒し、ダンジョンを攻略し、経験値を得てもらいたいですわ」
「そういうこった。私たちのいる国境西部は戦線が安定しているからね。時々海を渡って侵略してくる魔物どもを海に追い落としてやればいいからね。東部と比べればかなり平和ってわけよ」
　現在聖教国は東部と南部と西部で魔王の軍勢と衝突しており、南部と西部は海を挟むため比較的平和な一方で、東部は血みどろの地獄絵図だと聞く。
「東部における聖教会の軍団は、現在かなり厳しい状況に置かれています。そのために平和な地域で新兵に経験を積ませ、前線に送る必要があるのですわ」
「なにせあっちは魔王が直々に兵を率いてるからなぁ……。しかも配

下ネクロマンサーばっかり。もう最悪ってことね。」
「ひょぇ……」
ネクロマンサーの司る権能は、我らが光の女神にとっての天敵である。奴らは死体をアンデットに変えて、毒と呪いの術式を積んで特攻させてくる。さらには死体爆破の術式も開発されており、死者蘇生まで手が届く最高峰の権能を誇る女神様に対してすこぶる相性が悪い。
生きてさえいりゃ蘇生できるのに、死体をバラバラにしてさらには疫病もばら撒いてくるから出鱈目だ。
「それで攻略にはいつ向かえばいいですか？」
「3日後だ。詳しいことは全てエルシィが知っている。彼女に聞いてくれ」
「ん。任せて」
エルシィはフードを揺らしながら胸をぽよんと叩いた。

3人で学長室を出る。
外に出ると、だいぶ傾いた陽が影法師を細長く地に映していた。
「いよいよ本物のダンジョン攻略か。ドキドキするな」
「そうね、でも私たちなら大丈夫よ」
「うん、そうだね。俺も心配してないさ」
示し合わせてもいないのに、ジナと目線を交わって少し照れる。想いが通じ合ったように思えて心地よい。
今までは野生のモンスターや野良で発生するダンジョンを相手に経験値を積んできた。
魔王の統率する魔物たちと相対するのはちょっと緊張するが、いざとなったらディーのヒールもあるし、俺の異世界の勇士スキルがある。
まあ死ぬことはないだろう。
いつもはジナと2人で帰っている道だが、今日はエルシィさんもいるのでなんだか落ち着かない。そわそわする。

……。

なんかすっごい着いてくるなこの人!?

「エルシィさんはどこに住んでるんですか？」

「ん。君たちの家の隣」

「え、隣だったんですか!?気が付かなかった」

「ん。ずっと監視してた。タイガとジナが起きてから寝るまで。タイガが起きたらまず伸びをしてから歯を磨くのも、タイガが寝た後にジナが布団の中でゴソゴソしだすのも……」

「ちょちょちょちょ!?何を言い出すの!?!?ねぇ、待って!?!」

ハァハァと息を荒げながら、宙を舞う金色のツインテール。

「ん。２人は同棲してるのに何故何も起こらない……？私は疑問に思う」

「それはまあ色々や訳があってですね……」

そんなものない。俺が童貞すぎるだけ。

いつでもウェルカムなんすよ。ただこの世界でセッ……に積極的な男ってこう、ブランディング的に、ね？

「うぅ、手出せるなら出してるわよ……。でもタイガに嫌って言われたらもう立ち直れないから……」

家に帰っていつも通りお風呂入ってご飯食べて寝た。今日はジナが夜ご飯を作ってくれた。とても美味しかった。

おやすみ世界。